
鳴らないピアノ

尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳴らないピアノ

【Nコード】

N1649A

【作者名】

尋

【あらすじ】

恋人に裏切られ、自殺を図ろうとした少女、メイ。海に飛び込み、意識を手放す。気がつくと、そこは不思議な『死』の世界だった。。。

死。

—— 苦しい —— 息ができない —— 今更だけど —— 何だか
怖い ——。

どうしてなの —— ? —— どうして私を —— 最期にその答えを
知りたかった ——。

…… 誰…… ? —— ここはどこ? —— 天国? —— 地獄? —— それとも私…… 生
きてるの? —— あなたは…… そうだ、私はあなたを知ってる…… あな
たは ——。

「 —— クラウス! ? —— 」

私は飛び起きて、クラウスを突き飛ばした。クラウスは驚きもせず、
ただ私を見ている。

「 どうして! ? —— 何でここに…… 」

言いかけた言葉をのみこんだ。周りの景色は、まったく見覚えがな
い。私は辺りを見回すと、混乱した頭で、必死に状況を把握しよう
とした。

どこまでも続く荒野には、まるで似合わない大きな城。その城か
ら少し離れた場所に、石でできた立派な天使像がある。翼の片方が
もがれるように無くなっていて、何だか不気味だ。後ろを見ると、
川が流れていた。川は途中で無くなっているのにもかかわらず、水
が流れている。人工物なのだろうか。水は綺麗だが、魚が一匹も泳
いでいない。変わりに、見たこともない生き物が、川底を這うよう
にして動いている。空を見ると、月が出ていた。赤い月だ。赤黒い
空の色と溶け合っている。空に、波紋が広がった。……こんな場所は、
知らない。そして、クラウス。よく見ると、どこかが違う。茶髪で、
長身で、どこからどう見てもクラウスなのだが、何かが違う。そん
な気がする。

私は突き飛ばされたままの格好で動かない男に、急いで頭を下げ

た。

「ごめんなさい！　あの…私の知り合いに、あなたによく似た人がいて、それで……」

「……………」

その男は無表情で私を見ている。怒っているのだろうか。男は先程から瞬きをしていない。死んだように、動かなかった。

私は多少気味悪く思いながらも、必死に謝った。だが、男は口を開かない。からかわれているのか？　それとも、言葉が通じないのか…。私はだんだん苛々してきて、とうとう背を向けた。喋らない男にいくら話しかけても無駄だ。とりあえず、あの城へ行こう。誰か、いるかもしれない。そう思っただけで歩き出した。

「……クラウドに裏切られたんだね、可哀想なメイ……」

「えっ……！？」

振り返ると、男と目が合った。腕を組んで、ニヤニヤしている。からかっているようにしか見えないが、何だか優しい感じがした。まるで、昔のクラウドの様に。

「…別に、からかってないよ。キミが、話す事を望まなかっただけさ。キミはさつき、謝るのに必死だっただろう？」

私は一歩後ろに下がり、男を睨んだ。何なんだろう、この男……。

「ボクが誰であろうと、キミは驚かないよね。キミ、死ぬつもりだったんだろう？　ここは天国、あるいは地獄だと言っても、キミは悲しんだりしない。そうだろ、メイ」

「！　どうして私の名前……」

「キミがボクを知りたいと思ったから、ボクも教えてもらったんだ。…さて、どうしようかメイ。キミには、早く選んでもらわなくちゃね。何がいい？　もう一度溺れる？　今度は必ず死ねるよ」

「なっ……あんな思いは、一度でいいわよ」

実際、苦しいなんてものではなかった。苦しみが早く終わる事だけを願った。もう二度と、あんな思いはしたくない。

それよりも、何でこの男はそんな事を言ったのだろうか？　嬉しそ

うに笑っているのが、余計に気持ちが悪く感じられる。

「早く決めてね。じゃないと、未来永劫この地に閉じ込められちゃうから」

「……ここは何なの？ あなたは一体何者？」

「うーん……ここはね、死の国とでもいうのかな。自ら死を選んだのに、死にきれなかった人たちが来る場所さ。まあ、この世界は存在しないから、幻でも正解だね。

キミ達の想い次第では、この世界は大きく変わるよ。この世界は、キミ達が最も望む形で死を与えてくれる。もちろん、この世界でできる範囲でね。今はこんな荒野だから、川で溺れ死ぬくらいしか方法は無いけど、メイが望めば世界は変わる。

ちなみに、ボクはこの国の王様で、あの城の主人で、キミ達の執事……とでも言えがいいのかな。ここまで来たら言わなくてもわかると思うけど、ボクは人間じゃない。生きてはいないから、絶対に死んだりしない。ボクのこの姿は、キミ達が一番望む姿になる。キミの場合は、クラウド。ボクの事も、そう呼んで。嫌なら別の呼び方でいいけど、キミはボクをクラウドと決めた。だから、ボクはクラウド以外の何者でもないんだ。でも……メイの世界のクラウドにはない。……ボクも、存在しないよ」

何だか、大変なことになっているらしい。男——クラウドが話した事は、現実では考えられない。頭の中がグチャグチャで、頭痛がする。私は頭を押さえてしゃがみ込んだ。

「まあ大事な事は、キミがこの世界で死を選択する事だね。期限は、次の満月。それを過ぎると、キミは人形になって、この場に永遠に残る事になる。死の国から旅立つ事が、できなくなってしまうんだ」

「……じゃ、じゃあ何？ 私はここに、死ぬために来たっていうの？」

「そうさ」

死ぬために——私は嫌だった。死が迫っていた時、とても怖かったから。思い出して、身震いする。

「せつかく…助かったのに？」

「キミは死にたかったんだろう？ 何でそんなことを聞くのさ？」

「……怖いからよ。もう、いいじゃない！ 私を帰して！」

「うるさい黙れ！！」

突然、クラウドが声を張り上げる。一瞬怯えた表情に見えたが、顔を真っ赤にし、肩で息をしている。怒って、興奮しているのだ。

「な、何よ……」

「そんな事は、許されない！ そんな考えを持つだけで、死の国を出ることはできない！ 生きて帰ろうだなんて……人の道に外れる！！」

クラウドは必死だった。何か、困る事があるのだろうか。おそらくクラウドの言い方からして、元の世界に戻る方法はある。だがそれは、クラウドにとって不都合な事なのだろう。

それにしても、この怒りようは以上だ……。

「ごめんなさい」

「……わかれば……いいんだ。それより、早く決めてくれ。キミのためにも」

謝った途端、クラウドは笑顔に戻った。作り笑いなような気がする。と突然、クラウドは膝を落とした。

「……何だか気分が……ボクは、城にいるからね。決まったら……おいでよ」

そう言い残すと、クラウドは急に目の前から消えた。

とにかく、この世界を調べる必要があるだろう。クラウドが何かを隠している事についてはもちろん、次の満月を過ぎたら、本当に人形になってしまうのかとか、『キミ達』と言っていた事など、謎はたくさんある。そのうち、元の世界へ戻る方法についても、何か掴めるはずだ。

「……城と反対方向に行ってみよう」

メイは赤い月が沈みかける方へ、歩きだした。何としても、秘密を解き明かしてみせる。そう、硬く誓った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1649a/>

鳴らないピアノ

2010年10月9日01時33分発行